



南葵音楽文庫ミニレクチャー Vol.12

ロンドン・音楽・1914

林 淑 姫

2018年3月3日(土) 11:00

南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)

南葵音楽文庫

和歌山県立図書館内

和歌山市西高松 1-7-38

tel.073-436-9500



Covent Garden



Dame Nellie Melba
(1861-1931)



Sir Henry J. Wood
(1869-1944)



三浦環
(1884-1946)

私がケンブリッジに赴くと間もなく、倫敦に音楽シーズンが訪れた。欧州大戦前の、所謂十九世紀欧州文明の華やかな頃であるから、独逸ドイツ、伊太利のオペラはもとより、全世界の優れた音楽家はこの倫敦の楽季(シーズン)のために集まり、幾多の新人も此処からデビューするといふわけで、その頃の倫敦の楽壇はまことに殷賑の極みを尽していた。

周知のやうに、芸術上の新しい運動は、倫敦で紹介されてから世界の市場に出るといふ風で、新人や大家も先づ倫敦でデビューして次に他の大都会に移るといった形であつたから、有名なコヴェント・ガーデン座などもプログラムには、カルソー、ヂェラルディン・ファーラー、ネリー・メルバ、フリーダ・ヘムベル、テトラツィーニ、マッコーマック、ジオヴァンニ・マルティネリと云つた世界の大声楽家の名が連ねてあつた。実際、その当時私はプログラムを見たゞけで胸の高鳴るのを禁じ得なかつたものである。

然し、一方ケンブリッジに在つて勉強しなければならなかつた私は、この素晴らしいプログラムも新聞の上で見ただけであつた。ヴェルディの歌劇「アイダ」やカルソーの出演する「リゴレット」などは、日本にゐた時から蓄音器を通じて声や歌ひ廻しまで親しんでゐたので、是非とも見たいと思つたが、どうしてもケンブリッジを離れることが出来ず、いづれその中には見られるであらう」と自ら慰めてゐるより仕方がなかつた。

けれどもこのシーズンにたつた一つだけ見ることが出来た。それは、プッチーニの「ラ・ボヘム」であつた。その時は全く天にも昇るほど嬉しかつた。その時、主役ロドルフォにはマルティネリが扮し、ミミの役はメルバが受け持つた。(徳川頼貞『薈庭楽話』より)